

ドラフト会議で考える

今回のドラフト会議で、本学工学部総合システム工学科の隅田知一郎(ちひろ)君が4球団から1位指名を受け抽選の結果、埼玉西武ライオンズと入団交渉することになりました。ドラフト当日は彼の出身地である長崎も含めマスコミ27社が本学に集結。西武ライオンズに決定後の記者会見が全国放送されると「西日本工業大学、SNSトレンド入りおめでとう」、「大学がどこにあるかやっとわかった」などの電話やメールを多数いただきました。

「名は体を表す」と言いますが、かつて本学は「九州工科大学」で開学申請したのですが「他大学と混同する恐れがある」と却下され現在の名前になった経緯があります。Wikipediaには「西日本とは、日本を大きく分ける時に使用される語で、日本の西半分を指す。対義語は東日本」とあります。九州では本来の意味のほかに1000年以上「都」があった畿内より西にあるという意味合いやマーケットを意識して西日本という名称が良く使われています。しかし今回、西日本という名前はイメージをつかみにくい言葉であったことを再認識しました。

そのような中で、西日本という地方や名称に関係なく隅田君が見出されたのは野球界のスカウトという人材発掘システムが機能したためと感じました。また地方の小さな大学でも学生が大志を持って努力すれば社会が求める人材育成が出来るという自信を持つ事が出来ました。一般学生の人材発掘システムは各種の発表会やコンテスト、インターンシップでしょう。学生時代に将来何をしたいか考えるという明確な意識を持ってこれらの機会に臨めば、どこかでスカウトの目に留まるはずで、試合で目立つには練習が必要ですが、試合に出れば自分の長所や短所が見えてきてどこを伸ばせば良いかを知ることができます。

仕事の形がジョブ型にシフトしつつある現在、これから大学が力を入れるべきスカウトの視点を考えるきっかけを作ってくれた隅田君にエールを送ります。

Connect to the Future ~未来へつなげ~

表題は先月末に行われた今年の大学祭のテーマです。学部が違っても同じつなぎを着た大学祭実行委員会の学生たちは、大学祭を企画・準備をする中で一生の友人に出会ったり模擬店やイベントの感染対策を通じて実社会の仕組みを体験したりしました。イルミネーション企画では装飾デザインだけでなく近くの病院の入院患者からどう見えるかなどにも気を使い、電源は太陽光発電と蓄電池を組み合わせるなどカーボンフリーにも配慮しているのに感心しました。

日本は現役2人が1人の高齢者を支える人口減少社会にありますが、世界は78億を超える人口の中で競争社会にあります。グローバル化で水平分業が進み日本の製造業は海外に流出、「高品質なものを安く提供して稼ぐ」という日本のビジネスモデルは通用しなくなっています。そしてあらゆる情報がデジタル化されAIが活躍するDX時代を迎え知的労働者も合理化の危機にあります。このような中で地球環境問題やパンデミックに直面し世界中がSDGsに取り組んでいますが大人は未だに「一致団結して経済的な豊かさを実現する」という成長の強迫観念から抜けだせていません。

しかし、高度成長時代を知らないデジタルネイティブの学生たちは「成長とは異なる本当に豊かで幸せを感じられる未来」を信じて大学祭に取り組んでいました。例えば、模擬店で自分が書いたイラストを缶バッジにして売っていた学生が「ローカルにいても世界とつながれる時代、地元で好きなことを仕事にしたい。」と語った言葉が「車椅子や寝たきりの生活を送る障がい者がロボットを操作し自宅から離れたお店で接客するそんなロボットカフェが東京日本橋に開店した。」というテレビニュースと重なりました。

準備や跡片づけの際も笑顔で、すれ違いざまに「こんにちは！」と声をかけてくる学生に触れ、心配せずともテーマ通り「お金では買えないつながりを重視した新たな未来」は来ると実感できた大学祭でした。